

# PURE 1

*M a n a m i e s Y u s e i*

---

風

*fuu*

*eternity*



エタニティ文庫

## Contents

PURE 1 5

特別番外編

ただ、彼女に向かって…… 389

PURE 1

## 1 天敵との遭遇

「くやしい。くやしい。くやしーいっ」

ヒステリックに喚く藤堂蘭子を前にして、早瀬川愛美は、できることなら他人のふりがしたかった。

遊園地内のファーストフードの店内に女三人座っているが、日曜日ということもあって店の中は空いた椅子がないほど混み合っている。周囲が騒々しいとはいえ、蘭子のヒステリックな叫びは、周りの注目を否応なしに集めているに違いないわけで……

「たいした男を連れてたわけでもないくせに。あのクソ女！」

友の罵声はまが恥はずかしくて、愛美は唇を噛み締め、頬を真っ赤に染めた。

愛美の隣に座っている、一風変わった性格の桂崎百代は、愉快そうににやにやしているばかりだ。愛美は視線を巡らし、親友のはしたない言葉に対する周囲の反応うかがを窺った。すぐ近くにいるアベックが、こちらをちらちら見ながら笑い合っていた。アベックの女性のほうと目が合いそうになった彼女は慌てて視線を戻し、意味もなく黒縁眼鏡の位置を直した。

置を直した。

「蘭ちゃん、周りに人がいることを忘れないでほしいんだけどお」

愛美は顔を赤らめつつ、頭から湯気を立てんばかりにカッカしている蘭子を、彼女にできうる限り咎とがめる口調でたしなめた。

「ほんと、見苦しいよ」

あつけらかんとした顔で声を潜めもせず百代が言った。当然、蘭子の顔は怒りに歪んだ。

「なんですってえ〜」

名前のように、あでやかで華のある綺麗な顔は台無しだ。

自分の美しさを鼻にかけるきらいがある蘭子の鼻先に、鏡をつきつけてやりたいものだ、愛美はため息をつきながら思った。

「とにかく、あんなやつらに負けてなるものですか。こうなったら、もうなにがなんでも彼氏を作るわよっ！」

怒りに震える声で蘭子が宣言するように吼え、愛美と百代は思わず目を合わせた。

強情さにかけては誰にも引けを取らない蘭子だ。こうと決めたらとことんやるだろう。しかし、この傲慢で自己中の塊である蘭子と付き合おうという殊勝な男性など、果たしているものだろうか？

「まあ、頑張ってみたら……どうかね」

愛美は気軽に励ました。どうせ、ひとごと……と。

「もちろん、あんたたちも彼氏を作るのよ」

「はひ」

とんでもない蘭子の発言に、驚きすぎた愛美の口からは、しゃっくりのような音が飛び出した。

愛美は蘭子をまじまじと見つめた。

「あの三馬鹿トリオですら男がいるんだもの、わたくしたちが本気になれば、至極簡単なことよ」

傲然と言いつつ蘭子は腕組みをし、見下すように目を細めて愛美と百代を睨んできた。

「わたし一人じゃ、トリプルデートなんてできないことがわからないの」

愛美は顔を引きつらせた。蘭子はどこからか男の人を適当に見繕ってきて、強制的に彼女たちに押しつけるつもりじゃないだろうか……

こんなことになったのも、蘭子を敵視している、奥谷静穂が率いる仲間三人のせいだ。三人はことあるごとに彼女たちに絡んでくるのだ。

蘭子はその性格がたつて敵を作りやすい。なかでも静穂は、蘭子に対して憎悪を燃

やしていると書いてもいいぐらいだった。

静穂は家柄もよく容貌も秀でているのだが、どうしたって蘭子に負けている。愛美にしてみれば、そんなことはどうでもいいことだろうと思うのだが、静穂のプライドはそれを許さないらしかった。

そしてつい先程、この遊園地内で静穂一派が各々、彼氏を連れているのにばったり出くわしたのだ。もちろん、それが偶然とは誰ひとり信じていない。

「遊園地に女だけで遊びにくるなんてかわいそうに、もてない女にはなりたくないわ、わたくし」

優越感を声にも顔にもおっぴらに滲ませて、すれ違いざま、静穂は聞こえよがしにのたまった。そんな侮辱に、この蘭子がおとなしく黙っているわけがなく……

愛美は蘭子に反論しようとして口を開きかけたが、そのまま閉じた。

いままでの経験からいって、頭に血がのぼった状態の蘭子を論すなんて無駄なことだ。どんな論争も平行線を辿るだけ……

ここは蘭子を落ち着かせるために、話を合わせておくのが一番いいと愛美は結論を出し、百代に向けてこっそり目配せした。何を考えているのかわからない百代だが、頭の回転は速いのだ。

「ま、そだね」

愛美の考えをうまく察知してくれたのか、百代は間を置かず頷いた。彼女はこの事態が面白いらしく、楽しみに目玉をくるくるさせている。

自分の意見が親友ふたりから支持されたことで、蘭子の機嫌は途端に良くなった。

「そうと決まれば、まずはリストを作らなきゃね」

リスト？

眉を寄せた愛美と百代のほうへ、蘭子はぐつと身を乗り出ししてきた。

翌日の午後、三人は学校から車で十五分のところにある百代の家にいた。

百代は思考も発言も変わっている子で、彼女の趣味も同じようにとても風変わりだ。

当然というか、この部屋にも普通のものがない。

グロテスクといえるようなぬいぐるみを、可愛いと叫びながら抱き締める彼女の私服もその種のものだし、当然というか、棚に並ぶDVDや本も、おどろおどろしいものばかりが並んでいる。その背表紙にすら愛美が視線を向けられないようなものが……ずらりと。

愛美が百代や蘭子と友達になったのは、ここ半年のことだ。愛美の父の徳治とくじが、蘭子たちの通う名門私立高校の、大学の陶芸の教授として雇ってもらえることになり、それに応じて三年になると同時に、愛美は編入してきたのだ。

芸術家肌というのか、愛美の父は笑い顔などたまにしか見たことがないほど無愛想な人間だ。それに自分の思いを偽って、ひとの機嫌を取るなんて逆立ちしたってできるひとはない。もしかすると、それがたまたま以前勤めていた大学はクビになったのかも知れない。

ここへ来るまで、陶芸窯のある山の中の家で、父の陶芸品を生活の糧にして、親子ふたり暮らしていたが、いまは学校の近くにあるいくぶん老朽化したアパートに移り住んでいる。

ここでの生活が嫌ということはないが、山の中の暮らしは愛美にとってお気に入りの世界だ。たつぷりの自然と木と語らえる静寂。そして窯から立ち上る煙と、独特の匂い。工房には、父が他者を入れることを嫌ってあまり入らせてもらえないのだが、工房の外で、もらった土をこねては、実用に使う皿や鉢などを愛美は創らせてもらっている。

自分で土をこねて出来上がった皿を手にしたときのジーンとする静かな感動は、父を理解できたと思える特別な瞬間だ。

「候補者は揃ったわ」

蘭子はすでに勝ちを決めたかのように、自分の書きあげたリストを高々と掲げて叫んだ。切り取ったレポート用紙を前にシャーペンを握り、愛美は真面目に考え込んでいるふ

りをしていた。真向かいに座っている蘭子は、テストのときとは比べ物にならないくらい真剣な顔で見直しを始めた。

愛美の右隣にいる百代の紙を見ると、これが驚いたことに、びっしりと書き込まれている。

立ち上がった蘭子が、愛美と百代、双方の紙を点検するように上から見下ろしてきたのに気づき、愛美は慌てて真っ白な紙を隠そうとしたが、間に合わなかった。

「愛美つたらやる気あるの。白紙のまんまじゃないの。誰でもいいから早く書きなさい！」  
ガミガミと嘯みつくように怒鳴られ、むっとした愛美が言い返す前に、蘭子は標的を百代に変えた。

「百代。あんたつてば、学校中の男子生徒の名前全部書いてんじゃないの？ 真剣にやりなさい、真剣に」

真剣なのはやはり蘭子だけのようだ、愛美は胸を撫で下ろした。

「だってさ」

百代は面白くなさそうに呟いた。

「言い訳はいいわ」

ぴしゃりと言った蘭子は百代をねめつけた。

「とにかく、百代の彼氏候補から選ぶわよ。この中から、まず三人ぐらいにまで絞らな

きゃね」

そう言っただけで考えた蘭子は、ぼんと手を打ち、指で紙面をさした。

「百代、この中から、いまずぐでも、キスしてもいいと思う男だけ残しなさい」

「は……キス？」

百代はぼかんとして、それからきゅっと眉を寄せた。

「誰ともいやよ」

「なら、手を握られてもいいかなと思う人でもいいわ」

そう言われた百代は、紙をじっと見つめ、ほとんどの名前を二重線であっさり消した。それでも数人の名が残ったようだった。一人は同じクラスの石井慶介<sup>いしいけいすけ</sup>。もう一人は彼

女のいとこだと言う。

「あんたの幼馴染の石井ねえ。……あいつじゃ……ねえ」

愛美は石井の顔を思い浮かべた。人の良さそうな垂れ目の男子だ。

「……冴えないんじゃないかしら。三馬鹿との対決には……こう、もっと、ねえ」

蘭子は顔を斜めに向けて、満ち足りなさのこもったため息をついた。その表情から、石井が百代の恋人候補から消されたのがわかった。

「まあいいわ。それじゃあ、お次は……愛美ね」

蘭子はそう口にしつつ、愛美の手に行っている白紙の紙を鋭く見つめてきた。

「わたしは……その」

もごもご言いつつ、愛美は蘭子の目に触れないよう、紙をテーブルの下に隠した。「と、とにかく、蘭ちゃんの後でいいわ。まだひとりも書いてないし……」

ありがたいことに、蘭子は目を細めつつも、愛美の提案に素直に従ってくれた。

蘭子の候補者の名を上から順に辿っていく途中で、愛美は頭が痛くなった。一緒に見ていた百代は、ヒクヒクと口元を歪めている。ほとんどが年上で、高校生などひとりもない。それどころか有名タレントの名や、超人気アイドルに、ずいぶん年上の俳優の名前まで書き込んであった。

確かにこの中のひとりをゲットできたら、間違いない静穂の鼻を明かしてやれるだろうが……

愛美はリストの一番最後に書かれた名前が、すでに線で消されているのに気づいた。

「これは誰なの？」

ちよつとした興味を引かれて、愛美は蘭子に尋ねてみた。

ご機嫌な笑顔で、ランクづけのために番号や丸や二重丸の記号を名前の前に書き込んでいた蘭子だったが、愛美の問いに焦りを浮かべ、消された名前をさらに真っ黒に塗りつぶしてしまった。

「問題外！ 見映えはなかなかなんだけど。性格のほうか……ね」

「性格？ いったい誰なの？」

「とんでもなく尊大で、高飛車なのよ。呆れかえるぐらい傲慢で謙虚のけの字も知らないやつよ」

蘭子の説明に、愛美は笑いを堪えた。その説明に、蘭子自身を思い浮かべずいられようか……

「ぶっ、ぶははは……」

愛美と同じ思考を辿ったのか、派手に吹き出した百代は、お腹に手を当て、海老のように背中を折って苦しげに笑いこけた。

「何がおかしいのよ。変な娘ね」

笑いの理由にまったく思い至れないらしく、蘭子は怪訝な顔で百代を睨んだ。そのせいで、さらに百代の笑いは増長され、愛美は自分の笑いをまぎらわせる為に腿をぎゅつと抓った。

愛美と百代は、最終的に蘭子のお眼鏡にかなった男子を候補者として無理やりあてがわれた。

文句を言いたいのには山々だが、言ったところで蘭子は歯牙しがにもかけないだろう。

「それじゃ、おやつにしましょう」

蘭子は思いどおりにご満悦なように、銀色の入れ物からプリンを



取り出して、三人それぞれの前に置いた。プリンのカップを目にした愛美は、無意識に笑みを浮かべていた。

実はこのプリン、ただのプリンではなく、華の樹堂の超贅沢プリンなのだ。

蘭子は小さなクローラーボックスに入れて、このプリンを持ってきた。なぜ彼女が今日という日に、このプリンを持参してきたかという理由はわかっていない。このプリンが、愛美の理性をちよっぴり狂わせることを知っているからだ。愛美の鼻先にこのプリンをぶら下げれば、どんなことも承諾させられると、たかを括くくっている。だが哀しいことに、その考えは外れていないわけで……

愛美はため息をつきながら、プリンをすくってゆっくりと口に運んだ。

口中に、広がるしあわせ……

「愛美ってば」

百代の笑い声が聞こえ、愛美は閉じていた目を開けて、気まずく目の前のふたりに見つめた。

蘭子は得々とした笑みを浮かべている。その痾かんに障る笑みに反発したくなったものの、もうひとつプリンを差し出され、愛美は条件反射で笑みを浮かべた。

## 2 とんでもない電話

熱しやすく冷めやすい蘭子のこと、彼氏獲得作戦熱も自然と冷めるだろうと思っていたのだが、残念なことに、蘭子の熱は冷めるどころか加熱してゆくばかりだった。

それもこれも今回の騒ぎを引き起こした張本人の静穂たちが、ことあるごとに蘭子にちよっかいをかけてくるからだ。

彼氏がないことをあざけったり、不憫そうな目で同情を込めた慰めの言葉をわざとらしく囁ささやいたり……。そして静穂は、憤怒で真っ赤になった蘭子を見て満足そうに去ってゆく。

おまけに厄介事がもうひとつ。蘭子の天敵である櫻井比呂也ひろやが、取材と銘打って、蘭子の神経を逆なでしてくるのだ。櫻井の書く記事は狙いが確かで面白く、とても人気があるのだが、記事にされた本人にとっては愉快ではいられない内容のものばかり。

櫻井と蘭子のふたりは、これまでも寄ると触ると火花を散らしていたが、いまは一方的に櫻井が蘭子をやり込めている形になっていた。

静穂も櫻井も、いくらなんでもやりすぎだった。愛美ですら腹に据えかねてきたくら

いで……。らしくなく腹を立てている愛美とは対照的に、蘭子は無口になっていった。そんな中であって、百代だけはいつもとなら変わりなく、現状を見守っている感じだった。

そんなある日、蘭子が晴れ晴れとした顔で登校してきた。彼女は一日中ご機嫌で、静穂の皮肉も櫻井も、まったく相手にしない。いつもの攻撃が功を奏さないことに、櫻井は苛立ちを隠しきれない様子で、愛美がひとりのところを捕まえて、蘭子の変貌の理由を聞いたがった。

櫻井に腹を立てていた愛美は、もちろん彼をそっけなくあしらった。彼女の態度に櫻井がむっとしたのを見て、愛美はいくらか胸がすつとした。

この日三人は、放課後を待って、また百代の家に上がりこんだ。

「わたし、ついにやったの。やったのよー！」

蘭子は嬉々として叫んだ。

今日一日の蘭子の様子から、予想していたことだったが、やはり驚いた。

「誰？」

百代の問いに、蘭子は勝ち誇った顔で、まったく知らない名前をあげた。某有名国立大の二年生だという。

「本当に付き合うの？」

呆れた顔で百代が聞いた。

「もっちりんよ」

「蘭ちゃん、そのひとのこと好きなの？」

愛美はかなり不安な気持ちで尋ねた。

蘭子は人差し指を振り、ちちちと舌を鳴らした。

「そんなことは問題じゃないのよ。賢さとルックス、それだけ揃ってればいいの」

愛美は思わず天を仰いだ。さすがの百代も顔を曇らせている。

「やっぱり、高校生のわたしたちには同じ年齢くらいのこと……」

「何言ってるの！」

愛美は言い終わらぬうちに蘭子に噛みつかれてひるんだ。

「やつの彼氏も大学生なのよ。高校生の彼氏なんかじゃ到底勝てっこないじゃないの」恋愛に対して、勝つだの負けるだのと口にはしている蘭子が、愛美は不安でならない。

「さあ、これであいつを見返すのも時間の問題」

勝利を手にしたマウンド上のエースのように両腕を高々と上げ、蘭子はあけっぴろげに微笑んだ。

「さあ、次はどっち!？」

蘭子はふたりに向き直り、楽しげに叫んだ。

残念というべきか、喜ばしいというべきか、蘭子と彼の仲は一週間とたたぬうちに亀裂が入り、二週間を迎える前に崩壊した。自己中な蘭子であれば、十日持っただけでも奇跡に近いと愛美には思えた。蘭子の言葉どおり彼女が飽きたのか、相手が見切りをつけたのか真相はわからなかった。そして次の朝、ひと悶着あった。蘭子の破局を面白おかしい記事にして、櫻井がばら撒いたのだ。

「櫻井ったら、くやしい。くやしい。くやしーっ」

喚わめきたい気持ちには理解できないでもない。なので、愛美は蘭子を思う存分喚かせておくことにした。

結局は、口の軽い蘭子の身から出たさびなのだ。のろけてばかりいた彼女が、突然口をつぐめば破局が匂う。

蘭子は正直が取り柄で嘘がつけない。勘の鋭い櫻井にずばりと聞かれて口ごもったのは……

気が済むまで喚いたためか、蘭子はしばし静かになったが、握り締めた拳をブルブルと震わせ始めた。そして……

「ルックスのいい男なんていくらでもいるわ。櫻井、見てらっしゃい！」

蘭子は大声で叫びながら、天に向けて拳を突きあげた。

攻撃の対象が……いつの間にか変わっていた。

開くたびにキーツという金属が擦れた音がする玄関のドアを開け、愛美は買い物袋を提さげて我が家に入った。建物は古いが、部屋は三部屋あるし、愛美にも自分専用の部屋がある。

冷蔵庫の中に食料品をしまった愛美は、着替えのために私室に入った。

彼女の部屋はごくさっぱりとしている。人の目には、女の子の部屋とは映らないに違いない。和室だからベッドもないし、あるのは机と椅子。そして、ちよつとしたボックスの棚だけだ。本は好きだが、買わずに読みたい本は図書館で借りている。いまこの部屋にある五冊の本も、図書館の本だった。

服は既製品を買うよりも、安い生地や無地のTシャツなどを買ってきて、自分の好きにリメイクして着ている。それらの服は、蘭子や、個性的というかちよつとおかしなデザインの服ばかり着ている百代にも気に入られ、この半年の間に、ふたりにも何枚か作ってあげたりもしていた。この間の遊園地にも、色違いでお揃いの、愛美お手製のTシャツをみんなを着て行った。

ふたりからそのお返しにと、アクセサリーや化粧品や服などをもらったりしている

が、それらは愛美の身にそぐぬものばかりで、ふたりには悪かったが押入れのダンボールの中に収めたままになっていた。

けれど、蘭子と百代には本当に感謝していた。彼女たちが友達になってくれて、愛美はあの学園で浮いた存在ではなくなったのだ。

いまは違う意味で浮いているのかもしれないが、いまの彼女は……ひとりぼっちではない。

先に話しかけてきたのは百代だった。そして、百代の無二の親友の蘭子が、自動的についてきた。

ふたりとも平凡な愛美と違い、個性の塊で、一緒にいて飽きることがない。

まあ、たまには蘭子に翻弄ほんろうされて、ドタバタしなければならなくなるときもあるが、それも実のところ楽しかったりする。普通ならありえない体験もさせてもらえるし……

蘭子のとんでもない御殿のような屋敷に初めてお邪魔したときは、肝がつぶれるかというくらいの衝撃を受けたし、いまでも、上品な物腰の蘭子の両親と対面すると、愛美は声と足が震える。

エプロンを着けて台所に立った愛美は、テキパキと夕食の支度を始めた。

料理を作る作業は大好きだ。包丁とまな板が立てる音、鍋から立つ湯気、部屋に満ちる美味しそうな香り……。この時間は、まるで自分の手のひらが魔力を持っているよう

に感じる。

台所での仕事を終えた愛美は、自分の部屋から本を取ってきて、居間に座り込んで読み始めた。

父親が戻ってきたのは、それから一時間ほど経った頃だった。いつもと同じように言葉少ない父と食事をし、愛美は片づけを終えた。

風呂から上がってきた父と交代で風呂に入ろうとした愛美に、珍しく父は声をかけた。

「進学のことなんだが……」

どうやら、その問いを、父はずっと胸に秘めていたらしい。父のことだから、いつどうやって娘に切り出そうかと悩んでいたのかもしれない。けれど、すでに一度、進学のこととは話しあったのだ。こちらに引越してきてから、陶芸が好きなら父の学部に入っ

て本格的に学べばいいと言われたが、愛美は色々考えた末に、就職が有利になりそうな事務を身につけられる専門学校に進むと決めた。

陶芸はとても好きだが、娘が自分の教え子になるというのは、父にとっても他の教え子にとっても、あまりいいことではないだろうと思えたし、陶芸を学ぶための大学の学費は、愛美がぎよっとするほど高額なのだ。

「もう一度、考え直してはどうだ」

「でも……もう決めたし」

父の顔が曇ったのを見て愛美は戸惑ったが、専門学校への願書も出してしまっている。  
いまさら……

「恵依子えいこが……望んでるような気がするんだ」

「え？」

……母さんが？

「このところ、何か落ち着かないんだ」

そう言くと、父は胸の中のものを吐き出そうとするようにため息をついた。

亡くなった母が、陶芸を学ぶ事を望んでいるという父の言葉は、ひどく愛美の心を揺さぶった。

確かに生前の母は、愛美が創る焼き物を大切そうに手にしては、大袈裟なほど褒めてくれたものだった。

「とにかく、考えてみてくれ」

「お父さんは……わたしに陶芸を学んでほしいの？」

愛美は父と視線を合わせた。父の瞳に、動揺が浮かんだように見えた。

「お前は土と相性がいい」

徳治の視線は茶ダンスに向けられた。そこには愛美の創った器や皿が並んでいる。

「でもお父さん、やりづらくない？ 娘が入ってきたんじゃ……」

「それも考えたんだが……。娘ということは、内密にしておけばいい」

徳治はそれだけ言くと、自分の部屋に入ってしまった。

話は終わったのだろうと、愛美は風呂場に向かおうとした。

「愛美」

呼びかけられて振り向いた愛美に、父は大きな茶色の封書を差し出してきた。

「願書だ」

驚きつつ愛美が受け取ると、徳治はもう何も言わずに自分の部屋に引き上げた。

封書を手には、愛美は笑いが込み上げてきた。父とこんなに長い会話をしたのは、久しぶりではないだろうか？

学園に編入してふた月ほどたった頃、ひどく口ごもりながら「友達はできたのか？」と、ぶつきらばうに父が聞いてきたことがあったのを愛美は思い出した。ふたり友達できたと伝えると、そっけなく「よかったな」と言った。あのときは珍しいこともあるものだとしか思わなかったが……

語らない父だからと、彼女からあまり話すこともなかった。

父は愛美を気にかけてくれていたのに……きつと、ずつと……

唇を噛んで反省していた愛美は、胸にじんわりとした喜びを感じて笑みを浮かべた。

電話のベルの音に愛美は顔を上げ、歩み寄って受話器を持ち上げた。

「はい。早瀬川です」

「はい、ごきげんよう」

賑やかな蘭子の声が耳に響いた。よほど良いことがあったのか、ずいぶんと機嫌がいい。

「どうしたの？ 何かあった？」

「今度の週末、土曜日だけど空けといて頂戴」

完全に命令口調だった。何があっても譲らないわよと、その声は言っている。

嫌な予感がした。

「何をするの？」

「パーティよ」

「はい？」

馴染みのない言葉に、愛美は眉をひそめて聞き返した。

「パーティよ。その単語の意味は知ってるでしょ？」

それは……知っている。が……

「我が家が主催するパーティがあるのよ、それに参加するの」

「誰が？」

「愛美、あなた寝てたんじゃなくて。あんたと百代よ、決まってるじゃない」

父親が部屋から静かに出てきて、愛美の会話は自然に止まった。

徳治は台所のほうへと向かってゆき、その姿はドアの向こうに消えた。

「聞いてんの？」

受話器から聞こえる蘭子のガミガミ声に、愛美は意識を電話に戻した。

「ご、ごめん。お父さんがすぐ近くにきたもんだから……」

「もおっ、携帯なら家族に気を使うこともないのに。家の電話しかないなんて、不便でしょうがないでしょう？ 携帯くらいのもの、どうして持たせてもらわないのよ」

そんなことを言われても……

「別に、不便じゃないし」

「不便に決まってるわよ！」

噛み付くような大声が耳にビーンと響き、愛美はパッと受話器を耳から遠ざけた。

あー、びっくりした。耳の奥がまだジンジンする。

「あんたは持ったことないから、この便利さがわからないのよ」

まあ、そうなのかもしれないが……

「ともかく、ドレスはわたしが用意しとくから」

「ドレス？」

「そう。靴もバッグもあるから、あんたはいつものように、いつもの格好で、百代と一

緒にここにくればいいの。簡単でしょ?」

「簡単……?」

「いまいち意味を理解できず、愛美は意味もなく蘭子の口にした言葉を繰り返した。

「そう。簡単なことよ。来るわね?」

「あ……あの」

「何よ、まだ何か聞きたいこともあるの?」

「何のために、わたしと百ちゃんはそのパーティに参加するの?」

呆れたように鼻を鳴らす音が聞こえた。

「決まってるじゃない。そこらには転がっていない、ハイレベルな男を手に入れるためよ。頑張つてよ。それじゃあね」

ブツンと電話は切れ、愛美は呆然として受話器を見つめ続けた。

### 3 杖をひとふり

「少しは落ち着きなさい。愛美」

蘭子にいくらたしなめられても、愛美は部屋の中を歩き回ることをやめられなかった。

一時間後には、藤堂家が主催するパーティへ出かけることになっているというのに、とても落ち着いてなどいられない。緊張して胃が引きつりそうなのに……

いまこの場には蘭子の姉の橙もも子もいて、落ち着きのない愛美を見て、やさしい笑みを浮かべている。

髪をセットしてもらっている百代と、愛美は鏡越しに目を合わせた。彼女もまた愛美を見て愉快そうに笑っている。

愛美はみんなの背後から、そっと鏡を覗き見て顔をしかめた。そこには眼鏡をかけて気を張りつめた、青白い顔の見るからに冴えない女が映っている。

蘭子にパーティに適したドレスを借りることになっているから、身なりだけはおかしくないようにできるだろうが……

来るつもりはなかったのに……

蘭子の剣幕……そしてほんのちよっぴりの好奇心が頭をもたげ、のこのことやってきてしまった自分を愛美は呪いたかった。

上流階級とか庶民とか、そんな言葉になど、これまでなんの思いも抱いていなかったし、人間なんてみな同じという考えだったのに……

愛美は自分が一般庶民であることを、つくづく実感した。

百代の髪のとセットと化粧が済み、大変身を遂げた友を称賛の面持ちで見つめたあと、

愛美は覚悟を決めて鏡の前に座り込んだ。

彼女の三つ編みの髪がほどかれ、美容師が櫛で梳き始めた。

「素晴らしい髪をお持ちですね」

お世辞なのか、やさしい心配りか、美容師が感嘆したような声を洩らした。

「でしょう。愛美の髪って、ほんとつやつやできれいな。手触りも最高よ」

蘭子はまるで自分の自慢のように言う。その褒め言葉はくすぐったすぎて、愛美は恥ずかしさに頬を赤らめた。褒められるという立場に慣れていないせいで、どうにもいたたまれない。

「アップにしたりしないで、このまま垂らしたらどうかしら？」

美容師が蘭子の指示どおりまとめ上げようとするのを見て、橙子が遠慮がちに口を挟んだ。

「うーん。それもいいでしょうけど……。やっぱり、今日のところはぐんと大人っぽく仕上げしてほしいの。じゃないと、大人な男たちの目に妹としか映らないかもしれないわ。それじゃあ、今夜の意味がなくなっちゃうもの」

そんな意味など、なくなつたほうが良いのだが……

蘭子の意見が通り、愛美の髪は幾筋か髪を垂らした見事なアップに仕上げられ、小さな白い花を模した髪飾りが、頭のあちこちにたくさんつけられた。

髪型は文句のつけようもなかったが、黒縁の眼鏡をかけているのがアンバランスで、滑稽にしか見えない。

蘭子と橙子の華やかさ、そして愛らしい百代と自分を比較し、愛美はズンと気落ちした。髪をセットし終わると、すつと眼鏡が外された。

「あら」

美容師が、面食らつたような小さな叫びをあげた。

いったい何が驚きの原因となつたのか愛美は右と左に瞳を動かして探したが、わからなかった。

鏡に映るぼんやりとした愛美の顔に、はやけた色がつけられていった。

思いやりのあるみんなは、パーティに乗り気でない愛美のテンションをあげようという気遣いか、出来上がった愛美の顔を見て興奮の叫びをあげた。

「愛美の目って、こうして化粧すると、さらに大きく見えるわね」

蘭子が新発見というように笑い声とともに言った。

「愛美さんは、体格のわりに、お顔がちっちゃくていらつしやるから」

「ああそうね。それで目の大きいのが、なおさら目立つのね」

橙子の言葉に、百代は納得したように言う。

蘭子の用意してくれたドレスに袖を通すときだけは、愛美もドキドキしながら笑みを



こぼした。

こんなドレスを着ることなど、この先なかなかありそうもない。

百代のドレスは、これしかありえないだろうというくらいぴったりのピンクのフリフリで、百代を童話の中のお姫様に仕立てている。

蘭子というと、黒っぽい銀色の身体のラインをくつきりと際立たせるドレスで、同じ銀色の太輪の薔薇を髪に飾った彼女は、とても十八歳とは思えないセクシーだった。百代と愛美の仕上がりを見て、蘭子は自分のドレスの選択はやはり間違っていないかったと、やたら嬉しそうだった。

愛美のドレスは濃いクリーム色で、襟元をくるりと囲むように、やわらかな素材で作られた可愛らしい小花が散らしてあった。控えめなフリルが効果的につけられ、そのフリルにはほんの少しラメが散り始められ控えめに輝いている。可愛らしく、それでいてとてもエレガントなドレスだった。ただし、やたら胸元が開いていた。

着替えを終えた愛美を一瞥した全員の視線が、彼女の胸元に注がれたらしかった。

眼鏡を取り上げられて返してもらえない愛美には、はっきりと確認できなかったが……

「愛美のその胸は、マシガンくらい威力があるわ」

百代からからかうように言われた愛美は顔をしかめた。

「マ、マシガン？ ……ねえ、胸のところが開きすぎじゃない？」

「何言ってるの。わたしのも、姉様のだって同じくらい開いてるわよ」

叱るように言った後、蘭子は愛美の胸に顔を寄せるようにして、じーっと見つめてきた。「それにしても、愛美のおっぱいのふくらみは、手にとって食べたくなるくらい美味しそうじゃないの」

そんなとんでもない発言をし、蘭子は愉快そうにケラケラ笑った。

「蘭」

横にいた蘭子の姉が、妹を小声でたしなめた。

愛美は自分の胸を見下ろし、不安感でいっぱいになった。

「ね、ねえ……わたし、やっぱりやめておくわ。ここで本でも読みながら、暇つぶししてるほうがいいの。お願い、三人で行って……」

小さな白いバッグの金色の細い鎖を、引きちぎりそうなほど硬く握り締めた愛美は、駄目とわかっている。最後にもう一度懇願せずにはいられなかった。

「いまさは何言うのよ。支度もできてなのに、行かないなんて許さないわよ！」

唾を飛ばす勢いで怒鳴りつけるばかりで、蘭子はまるで取り合ってくれない。

緊張してよれよれの胃が、蘭子の怒号パンチを食らってずきんと痛んだ。

「別世界を見るチャンスだよ。愛美行こうよ。あんたが行かなきゃ、わたしがつまんな

いよ」

そう愛美をなだめるように言う百代は、もちろん浮いたりしない。カールした柔らかな後れ毛がふわりと額にかかった百代は、砂糖菓子みたいに甘くてとても可愛い。パーティ会場でも、ずいぶんと人目を引くことだろう。美人の蘭子と橙子の姉妹に至っては、パーティの華になること間違いなしのあでやかさだ。

ここに、年老いたやさしい魔女が現れて、杖をひとふり、魔法の力で百代のように、蘭子や橙子のように、輝く姿に変身させてくれたなら……

けれど、魔女も魔法も存在しない……

おとぎ話は……おとぎ話でしかないのだ……

#### 4 別世界への招き

パーティ会場に向かう愛美は、慣れないヒールのせいでよろめきそうになって蘭子の腕をぎゅっと掴んだ。

「大丈夫？　ちよっとヒールが高すぎた？」

「だから言ったのに……」

支度が終わっても蘭子は眼鏡を返してくれなかった。

ぽおっとかすんだ世界には不安でしようがないのに。

「ね、眼鏡はどこなの。お願いだから返して」

愛美は必死で焦点を合わせながら蘭子に懇願した。

「そんなもの、置いてきたわよ」

切って捨てるような言葉に、愛美は啞然として蘭子を見つめた。

「そ、そんな……」

彼女は半泣きになった。

「持つてゆくって言ったじゃないの。どうしてもって言うなら、返してくれるって……」

「いいからいいから、そのままが素敵よ。自信をお持ちなさい。わたしの次くらいには、きれいよ」

愛美はどっと疲れを感じた。

「それ聞いて、わたし、喜ぶべきなの？」

「もちろんよ」

当然というような蘭子の言葉に、愛美の疲れは二倍に膨れ上がった。

「百代はどこ？」

「えっ？」

一瞬沈黙が広がった。

百代は彼女のすぐ後ろについて来ていたはずだったのだが……

愛美は周囲に視線を走らせて、すぐに諦めた。いまの視界で、何を探そうとしても無駄だ。

「あっ、いたわ」

「どこに？」

「ずーっと後ろ。……まったくもう。百代ったらきよろきよろして……」

蘭子はイライラと足を踏み鳴らした。

「まるで、おのほりさんみたいじゃないの。すぐにやめさせなきゃ」

愛美が止める間もなく、蘭子はあつという間に愛美から離れていった。

川の流れに引つかかったゴミみたいに、ぼつんと捨て置かれ、心細いつたらなかった。人の邪魔になりながらも、しばらくの間はそのまま佇んでいたが、通り過ぎてゆくひとたちの迷惑そうな視線が自分に向けられているようで、愛美はいたたまれなくなった。決心した彼女は、ひとにぶつかって無様に転ぶことのないように、用心しつつ一歩一歩、壁のほうへと寄っていった。

壁を目前にした彼女の肩に誰かの肩が当たった。衝撃はたいしたことはなかったのだ

が、不安定なヒールのせいで、愛美は思ったより大きくよろめいた。咄嗟に壁の方向に手を伸ばしたが、手のひらに触れたのは固い壁ではなかった。

他人の身体に触れたことに驚いた彼女は、急いで手を引き、そのせいで大きく前に倒れ込んだ。

衝撃とともに、愛美は目の前のひとにぶつかった。相手はさつと両腕を広げ、彼女の身体を支えてくれた。おかげで床にひっくり返るといふ災難は免れた。

「ご、ごめんなさい」

お詫びとお礼を言おうとおずおずと見上げてゆく間に、彼女がぶつかったのはディナースーツを着ている男性だとわかった。

愛美は血の気が失せて青ざめ、相手の首から上に目を向ける勇気がなく、視線をウターンさせて俯いた。

ど、どうしよう。……別世界のひとだ。

「いえ……」

相手は短い言葉を発しただけで、それ以上何も言わない。

あまりのばつの悪さに彼女は真っ赤になった。

「不破。お前も来たのか？」

背後から来たらしい男性が、彼女がぶつかった相手に親しげに声をかけた。

彼女が壁と間違えた男性は不破という名らしい。

愛美はそーっと後ろを窺<sup>うかが</sup>った。同じくデイナースーツを着た男性だ。

「来ないわけにいかなくなつてね」

どうやらこの不破というひと、嫌々やつて来たらしい。

其感のようなものが湧いて、愛美は小首を傾げて微笑んだ。

それにしても、素敵な声だった。愛美はその声だけで不破という名の男性に好感を持った。そしてそんな自分がおかしかった。

相手は愛美に好意など感じていないだろう。迷惑なら感じただろうが……

ハイヒールの高さによろけてぶつかつてくる女など、迷惑以外の何ものでもないに違いない。

会話は続いていた。いまさら言葉をかけて謝ることもできないと悟り、彼女はそこからそつと離れた。すでに彼の意識から愛美は消えているだろう。

十歩ほど歩いたところで、愛美は一度だけ後方を振り返つた。

これだけ離れると、愛美の視力では、二人の男性は影法師程度にしかわからない。蘭子と百代が彼女を見つけて戻つて来てくれるまで、この場にいるしかない。

愛美は無意識に、肩にかかる一筋の髪に指を絡めた。

いつもなら、緊張したときなど、おさげの三つ編みを握り締めるとほつとするのだが、

これつぼちの髪ではたいして頼りにならなかった。

「積極的に男性にアプローチしろなんて言わないから、ふたりとも気楽にパーティを楽しみなさい。今日のシエフはまあまあ腕もいって評判だから、きつと美味しいわよ」

彼氏獲得のために、とんでもないことを強要されるのではないかと戦々恐々としていた愛美は、その蘭子の言葉に面喰らつた。

眼鏡を持つてこなかったことに、罪の意識を感じているのだろうか？

蘭子のほうは主催者の家の娘だからか、愛美や百代と一緒にはいられないようだった。それに、蘭子だけは、参加した目的を何が何でも果たすつもりだろう。

ここは藤堂家の別邸とのことで、パーティ会場はかなり広がった。真ん中の一番大きな部屋がイベントのために使用されるようで、壁際にそれなりの人数の楽団がいて、いまは軽快な音楽を奏でていた。その会場の両隣となるふたつの部屋も開放されていて、そこには様々な料理が用意されていた。さらびやかに着飾った参加者たちは、自由にその三つの部屋を歩き回つて楽しんでいる。

どんな場でも緊張することを知らない百代は、テーブル上の豪華な料理をさつそくパクついた。

料理は確かに美味しかった。百代という心強い友のおかげで、始めの緊張も薄れ、愛美は百代と一緒に楽しみながらあちこちのテーブルを回った。

## 5 悪漢と勇者

「愛美、わたし、おトイレに行ってくるから、これ持ってる」  
 小さくカットイングされたケーキを頬張っているところに、百代が皿を差し出してきて、受け取ったものの愛美は慌てた。

「わ、わたしも一緒に行く」

ただでさえ視界があやふやなのだ。こんな場所にひとりきりにされたくない。

どうもこの会場に集まった男性たちは、この場にいる女性全員に、公平に声をかけなければならぬという使命に燃えているようなのだ。

適当に相槌を打ち、手に負えなくなると、ふたりしてそそくさとその場を離れるというやり方で回避してきたが、ひとりではその自信もない。

「駄目だよ。食べかけのお皿、持ってけないもん」

百代からびしゃりと言われ、愛美はひるんだ。

「だ、だって」

「すぐ戻るってえ」

百代は安心させるように軽く愛美の肩を叩くと、両手に皿を持った彼女を置き去りにして、一番近いドアへと小走りで駆けていってしまった。

「こんにちは」

背後からの突然の声はひどく親しげで、愛美はぎよつとして振り返った。

まるで、愛美がひとりになるのを待っていたかのようなタイムリングだった。

まったく見も知らぬ男性が、声と同じ親しげな笑みを浮かべて、驚くほど至近距離に立っていた。

この近距離には困惑したが、そのおかげというか、相手の顔はそれなりに確認できた。「はじめまして……かな？」

何か素直に返事を返せない裏のありそうな笑みで、愛美の全身は硬く強張った。

そんな愛美の反応を敏感に悟ったのか、相手は親しげな笑みを巧みにひっこめた。その様は、ひどくずるがしこく見えた。

彼女は強張った足を無理に動かさし、やっとの思いで半歩後ずさった。

「私は芝下しばしたといひます。君は？ どこのご令嬢？」

質問に戸惑う愛美が両手にしている皿を、芝下と名乗る男性は、一枚ずつ取り上げて

テーブルに置いた。

「わたし……れ、令嬢なんかじゃありませんけど……」

動揺いっぱい、うわづりながら愛美は答えた。

その無様な返事に、芝下という男性は笑ったようだった。

「ふん。君、名前は？」

答えるのが当たり前というような傲慢な問いかけだった。もちろん正直に答えるつもりなどない。

困っている愛美に、芝下は手にしている液体が入ったグラスを差し出してきて、有無を言わず握らせた。受け取りたくはなかったが、受け取らざるを得ない強引さに愛美は怯えた。

この場からいまずぐ逃げ出したいのに、身が凍<sup>すく</sup>んで動けない。

「喉が渴<sup>かわ</sup>いでるんじゃないかい？ 冷たくて美味しいよ、ともかく一口飲んでごらんよ」強引に勧められ、逃げ場がなくなつてゆくようで恐ろしくてならなかった。

「あの、わ、わたし、あの、行くところがあるので……」

声<sup>こゑ</sup>が隠しようもなく震え、相手が笑いを噛<sup>か</sup>み殺したのに気づいて、頬<sup>ほ</sup>が熱<sup>あつ</sup>くなった。

「行くところ？ どこ？ 一緒について行ってあげるよ」

ねつとりとしたいやらしい響きの声に、彼女は全身がぞわつと総毛立<sup>そうもうたち</sup>った。

動かない足に恐怖が這い登<sup>のぼ</sup>ってきて、愛美は必死に顔を横に振った。

「お、お構いなく」

どう頑張<sup>がんば</sup>つてもうわずる自分の声に、愛美は泣きたくなった。

相手はそう簡単に引き下がる様子はなく、男性を振り切れないことに、さらなる恐れが湧<sup>わ</sup>きあがる。

百代が戻<sup>かえ</sup>ってきてくれさえすれば……

「遠慮はいらないよ。どこに行きたいんだい？」

相手がすつと手を伸ばしてきて、愛美の手首を掴<sup>つか</sup>んだ。

彼女はぞつとして目を見開き、「いや」と、小さな悲鳴<sup>なげめ</sup>を上げた。

「芝下」

押さえ込んだような低い声<sup>こゑ</sup>がした。

こ、この声……

彼女は助けを求めて声<sup>こゑ</sup>に振り向いた。

「その手を、放せ」

その低い声には、相手を庄<sup>つか</sup>するような響<sup>こゑ</sup>きがあった。

ありがたいことに手首はすぐに自由になり、ほつとした反動で愛美は涙<sup>なみだ</sup>ぐみそうになつた。

「不破の坊ちゃん、ずいぶんと忙しそうだったが、もうやってきたのか。残念」  
坊ちゃんという呼び名に、不破という男性から怒りが燃え上がったような気がした。

芝下という男性は、肩を竦めると、あっさり立ち去っていった。

芝下を見送ってでもいるのか、不破は少しの間黙り込んでいた。

お礼を言わなければと思ったが、いまになって心臓がドキドキして胸が苦しくなり、  
愛美は静めるのに難儀した。

「大丈夫ですか？」

不破というひとは、とても礼儀正しいようだった。

芝下と同じく見知らぬひとなのに、先ほどのような恐怖などまったく感じなかった。

それにこのひとは、さっき愛美がぶつかったひと……

あのときに言えなかったお詫びとお礼が言える。

愛美は緊張を解いて頷くと、心の底からほっとして、笑みを浮かべた。

「ありがとうございます」

「……いえ」

とても短い言葉なのに、彼が口にするのとひどく凛々しく聞こえた。

顔はまだはっきりと見ていないが、声だけに酔うということは現実にあるようだった。

「先ほども……あの、ぶつかってしまっただけですみませんでした」

「気づいてもらえていたのですね」

彼の声には、嬉しい響きがあった。

「あ、はい。いまの方が、不破っておっしゃったので、そうかなと思って……お詫びも  
言わないままで、ほんとにすみませんでした」

「でも、ぶつかったというほどではない。私の身体にちょっと触れた程度で……」

愛美は恥ずかしさから、気まずげに唇を噛み締めた。

そして百代の姿を探して、そっと周りを見回した。

百代ってば、まだ戻ってこないのだろうか？

「どなたか……探していらいらっしゃるのですか？」

「ええ、友達が……そろそろ戻ってくるはずなんです」

愛美は顔をしかめて、百代が消えたドアのあたりを窺った。

「百ちゃんったら、どうして戻ってこないのかしら……」

ため息をつきながら、愛美は呟いた。

「お友達が戻っていらいらっしゃるまで、ご一緒させていただいてよろしいですか？」

「え？」

「ご迷惑ですか？」

愛美は戸惑い、なかなか言葉を返せなかった。

相手は辛抱強く、愛美の返事を待っているようだ。

「で、でも、わたしといても……た、退屈だと思えますし……」

「では、退屈だと感じたら、お互いに好きなきときに別れるということはどうでしょう？」

言葉の端々に笑いがあつた。冗談として捉えて良いようだった。

愛美は瞬きして、その男性をちらつと見上げた。

ルックスは……すごくいいみたい。

一瞬そんなことを思った自分に気づいて、愛美は頬を赤らめた。

「どうやら、知らぬ間に、かなり蘭子に感化されているらしい……」

自分らしくない思考にどぎまぎし、彼女は先ほどからずっと手にしていたグラスの液体をぐいっと一口で飲み干した。

甘くてとろりとして美味しかった。けれど、喉を伝ってゆく間に、かなりの熱を帯びてきて彼女は驚いた。

「あ、はあー。こ、これ何？」

不破が愛美のグラスを取り上げた。

「ブランドーのようです。大丈夫ですか？」

「な、なんか、すっこく、……い、異常に、あ、暑いです」

潜めた笑い声が静かに響き、不破に笑われた愛美は、しゅんと萎しおれた。

「少し、外の風に当たりに行きますか？」

外？

思考回路が、少しばかり曖昧になってきたような気がした。それに、身体の重心も取りづらい。

「あ、えっと……」

彼の提案を耳に入れてから頭で理解するまでに、少々手間取った。

ふらふらする頭と発熱し始めた頬に、外気はきつと気持ちが良いだろう。風も吹いているかもしれない。

外に出るといふ案は、まったくもって素晴らしい案だと、愛美は感心した。

「はい。そうします」

素直に頭を下げて歩き出したが、どうも彼女は少しばかりよろめいたようだった。

さつと彼の腕が目の前に差し出され、彼女はありがたくそれに寄りかかった。

愛美は不破の導く方向へと、彼の腕にもたれたまま歩き出した。



## 6 夢の中は薔薇色

ぼうっとした思考と、ぼうっと霞んだ視界の中で、何か違和感を感じた。

その違和感が警告のようなものを発しているように思えて、愛美は立ち止まった。「どうしました?」

純粹に不思議そうな問いかけ……

危険や怖れるものは、その声にはなかった。

愛美は顔を上げて彼に向けて微笑んだ。

「なんでも」

「そう」

不破が微笑み返してきた。

やさしげで気が遠くなりそうなほど魅力的で、まるで夢の中の王子様のようなキラキラと輝く笑みだった。だが、彼の姿は視線を向けるたびに増えたり減ったりする。

双子のように見えたり、ときによっては三人以上にも見えるのだ。

二重三重に見える彼の顔と、はっきりしない彼の表情がもどかしく、愛美は視界が安

定するまで、幾度も目を凝らして彼をじっと見つめた。

彼の瞳をきつちりと捉えてほっとした愛美は、夢心地で微笑んだ。

意識はさらにはおっと霞み、彼女は夢の王子様に見惚れた。

外はとても気持ちよかった。屋敷の中庭はきれいに手入れがされ、薄暗さが増した空間は、巧みに配置された明かりに照らされて、薔薇の美しさが際立っていた。

ふたりは広い庭をそぞろ歩きながら少しずつ会話をした。けれど、ブランドーに酔ってゆるんだ愛美の脳はまともに働いてくれず、会話は途切れ途切れのものになった。

それでも彼は飽きる様子も呆れる様子もなく、愛美に頼れる腕を貸してくれていた。

会話が書物のことに及ぶと、ゆるんだ頭ながらも興味の対象であるからか、話は弾んだようだった。

ようだったというのは、会話が彼女の記憶にまったく残ってゆかないからだ。

明日になったら、これらすべてを思い出せるのだろうか? 愛美は眉を寄せて考え込んだ。

「まだ、お名前を聞いていませんでしたね」

その問いに、愛美は小首を傾げた。

「なまえ?」

王子様が頷いた。

「私の名は不破優誠ゆうせいです」

「ふわゆうせい？」

「ええ、名は、優しに誠と書くんです。それで、貴方の名は？」

「えっと……名前？」

王子様は真剣な顔で頷いた。

「どうやら愛美の名前が、彼にとっても重要らしい。

愛美は考え込んで、自分の名前を思い出そうと懸命になった。

しかし、やはり何かが記憶を呼び起こす邪魔をしている……

「……は……早瀬……」

そこまで口にした愛美の頬に、何かがふわりと触れた。

驚いて目を向けると、白い薔薇だった。

彼女がいま着ているドレスと同じような濃いクリーム色をしている。

「わあっ」

愛美は感嘆の声を上げた。夢の中にぴったりの美しさだ。

「綺麗……」

眩いたこの瞬間、酔いの回った愛美の思考から不破は消えていた。

彼女は薔薇を慈しむように指先でそっと触れ、香りを嗅ぐと薔薇の花に顔を近づけ

た。

そんな愛美の頬に、突然、彼の指が触れた。

「えっ」

彼女は驚いて小さく叫んだ。

触れた指はすつと頬から顎へと移動し、愛美は気づかぬうちに顔を上げていた。

ふたりの唇が重なっていた。

何もかもが自然で……脅威だった。

愛美の思考は、数秒間、無駄にぐるぐる回転した。

触れ合っている唇の感触……

驚きがエロチックな甘さに溶けてゆき、愛美は深まるくちづけに溺れていった。

我に返ったとき、愛美は彼の胸に顔を埋めていた。

男性の腕に抱かれている、非現実的な自分……

その現状を認められないまま、愛美は彼の胸からそっと顔を離した。

「あの、わたし……」

「何？」

不破は、愛美を抱き締めているのが、まるで自然なことでもいうような表情をして

いる。

「……け、化粧室に……」

腕がゆっくりと外された。

不破の顔を見上げる勇氣もなく、そのまま背を向けようとした愛美は、彼に手首を掴まれた。

「ここで待っていますから」

耳元に甘く囁かれ、愛美は頭の半分がジンと痺れたような感覚に陥った。

両頬を手のひらで包まれ、愛美の唇に彼の唇が重なる。

拒否するのが当然なのに、どうしても拒めない。

ブランドーのせいというより、彼の放つ強力な魔力のように、愛美には思えた。

再び自由になった彼女は、館のほうを見定め、少しよろめきながら小走りに駆け出した。彼女の髪についていた白い小花の髪飾りのひとつが、はらりと地面に舞い落ちたことに、彼女は気づかなかった。

## 7 儂く消えた夢

パーティー会場に戻った愛美は、すぐに百代に声をかけられた。

「愛美ってば、いったいどこにいたのよお？」

いましがたの突発的な出来事は、いまだ愛美の中で処理できずにいた。

何をどう言っているのか混乱し、何も言えないでいる愛美の手を、百代は引っ張りながら会場の出口へと連れてゆく。

それまで気づかなかったが、会場の中央にはグラランドピアノが置かれ、前もって蘭子から聞いていたように、橙子がピアノの優雅な旋律を奏でていた。

壁際の楽団も、演奏を引き立てるように音を合わせ、ピアノを弾く橙子は会場中の注目を集めていた。

いつものピアノの好きな愛美なら、うっとりとして聴き惚れるところだが……

「帰る時間なのに、愛美が見つからないから、どうしようと思ってたんだよ」

「帰る……？ いま、何時？」

「もうすぐ八時だよ。この玄関前に蘭子が車を待たせてくれてるの。それに乗って帰

つてつて……」

八時……！

それでは、愛美は彼と、一時間以上も一緒にいたことになる。だが、とてもそんなに長く一緒にいたとは、信じがたかった。

「蘭子は、まだ、ここにいななくちゃならないんだって……なんかこれから……よくわかんないけどあるみたいでさ」

大きな拍手が沸き起こり、百代が足を止めた。ピアノの演奏が終わったのだ。

橙子が自分を囲んでいる客に向けて、洗練された身のこなしで、優雅に膝を折って挨拶をしている。

淑女というのは、彼女のようなひとをいうのだろう。

「橙子さん、素敵過ぎだね。やっぱ、あの艶やかさは感嘆もんだよ」

そう言われても視界が充分でないいまの愛美には、橙子を確かめようもない。

進行役を務めている男性が、マイクを持って橙子から少し離れた場所に立ち、称賛の言葉と、ねぎらいの言葉を続けて述べた。

そこに少々小太りの婦人が、人の波から抜け出して橙子に近づいていった。

進行役のひとの対応からすると、藤堂家の親戚らしく思われた。

「まあまあ、素晴らしい演奏だったわ。橙子さん」

マイクの必要もなく、その婦人の声は会場内に響き渡った。

橙子は返事をしたようだが、婦人とは対照的にとても柔らかな声で、出口付近にいる愛美のところまでは聞こえてこなかった。

「不破家との縁談も、もうまとまる直前とお聞きしてしましてよ」

途端に、会場内は大きくざわめいた。

「やはりあの噂、本当でしたのね」

愛美のすぐ近くにいた、小さな集団のひとりが興奮したように言った。

「ええ。そのようだよ。不破家のご子息優誠様と、藤堂家のご長女の橙子様のご結婚となれば、ますます藤堂家は安泰ですわね」

「快く思わない者もいるでしょうけど……」

その会話は、声を潜めたくすくす笑いに転じた。

愛美は百代に何も言わず、ふらふらと出口から外に出た。

不破優誠……

王子様は、彼女と同じ名前で名乗らなかつただろうか？

私の名は不破優誠です……と。優しさに、誠と書くのだと……

車の後部座席で愛美は無意識にアップにされた髪をほどき、いつもの三つ編みに結つ

ていた。そんな愛美の前に、百代が眼鏡を差し出してきた。

「これ預かってたの。どうしても必要になったら、渡しなさいって、蘭子が……」  
受け取った眼鏡を、愛美はしばらくじっと見つめた。

「どうしたの、愛美？ あそこでなんかあった？」

「どうして？」

「だって……涙、こぼしてるから……」

百代に指摘されて、愛美は指先で頬に触れ、自分が泣いていることに気づいた。

彼女は慌てて眼鏡をかけた。視界はすっきりと晴れたが、愛美の胸中は激しく混乱していた。

舞踏会は終わったのだ……

あらゆる魔法も解けた……

胸の中にあるのは後悔なのか、不破に対する思慕なのか、愛美にはわからなかった。けれど、ひとつだけ確かなことがあった。

あの夢の中には、二度と戻れない……

夢は泡と消えたのだ。

## 8 頭の中のもやもや

「いまなんて？」

「申し込みがあったって言ったのよ。百代には三人、愛美には五人。その中から一番良いのを選んでおいたわ」

まるで、買い物物に行って、大根でも選んできたような軽い口ぶりだった。

昨日のパーティから一夜明けて、いまは午後の三時だった。

蘭子が集合をかけてきて、運転手つきの車でふたりを迎えに来て、こうして三人揃って喫茶店にいる。

「どうして蘭子のところに申し込みがくるのよ？」

蘭子のおごりのチョコレートパフェを頬張りながら、さっぱりわけがわからないというように、首を捻りながら百代が聞いた。

愛美の前にはフルーツパフェが置かれている。

ウエイトレスが運んできたばかりで、いままさに食べようと愛美がスプーンを手にしたところで、蘭子が爆弾に匹敵する、この発言をしたのだ。